

わたしの聖戦

女性が
働くこと
ということ

医学ジャーナリスト・医学博士

植田美津恵

連
233
載

桜の季節に想うこと

桜の季節になると、何となくザワザワした雰囲気、気が日本列島を覆う。

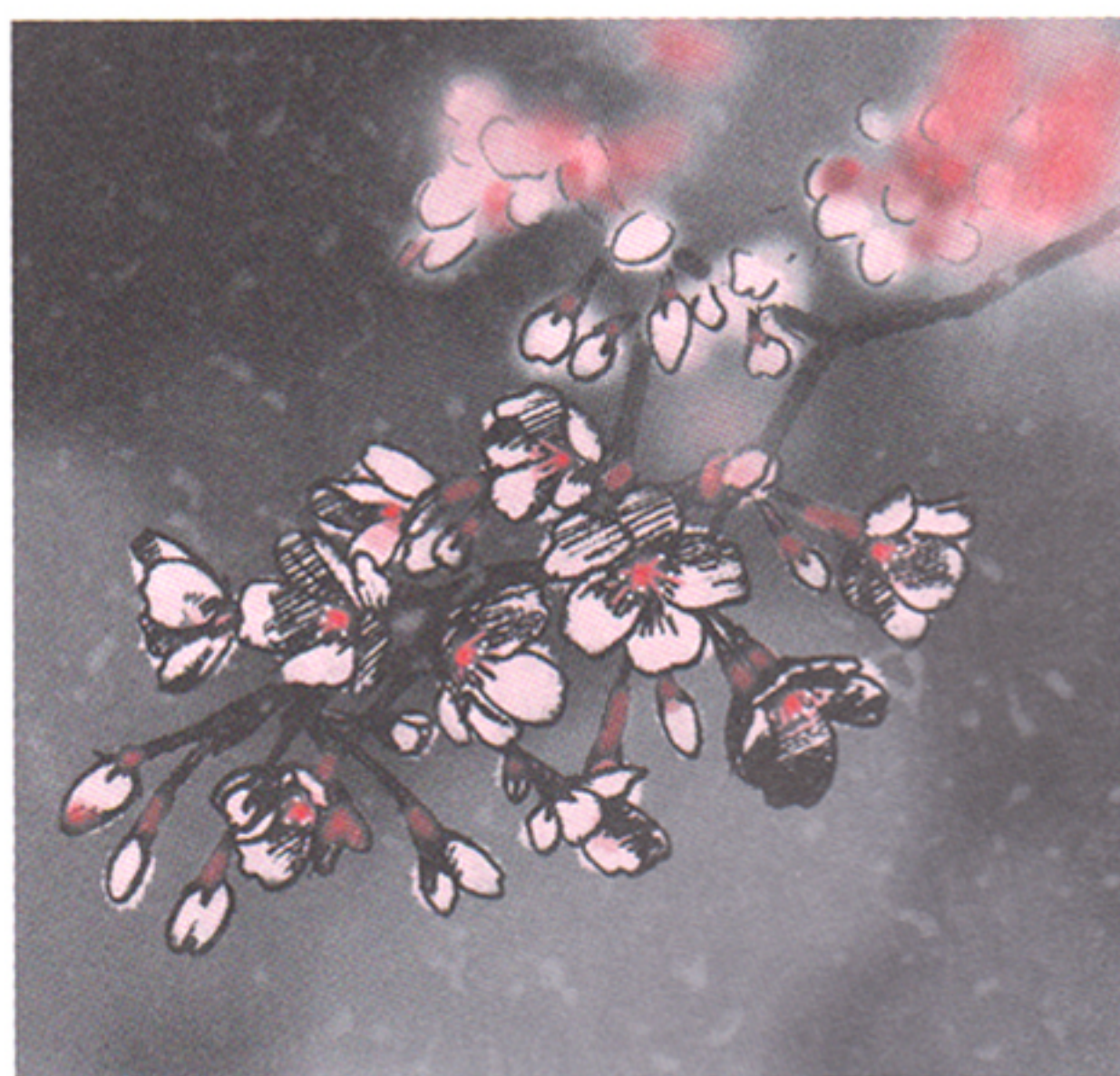
桜の開花予想のせいだ。桜の開花の基準に使われる木を「標本木」というらしく、有名なのは東京の靖国神社の桜木だが、「標本木」は全国各県に1本ずつあるという。

開花とは、5〜6輪咲いた状態を指し、いわゆる「開花宣言」が行われる目安となる。ここ数年テレビで見かける風景は、靖国神社の桜木の周りに多くの人が集まってカメラを向ける姿とその場で気象庁の人が「開花宣言」をする様子である。長い冬がようやく終わりつつある時期、寒さで強

張った人々の心に緩やかであったかな風がそよぐ。待つてました、とばかりの歓迎ぶりである。

かつて、日本では桜より梅が愛でられた。奈良時代に編まれた万葉集では、桜をテーマにしたものよりも、梅を謳（うた）った歌の方が圧倒的に多い。ところが、平安時代に入ると、その立場は逆転し、桜をモチーフとした和歌が断然増えてくる。一説によると、嵯峨天皇の京都への地主（じしゆ）神社行幸の際、そこに咲く地主桜があまりに美しいので、二度も三度も車を戻らせて桜を眺めた。それ以来、桜の美しさが絶賛されるようになった

と伝わる。なんとも雅（みやび）な伝承である。桜が日本人の心を釘付けにした決定打は、西行の存在とその歌だろう。西行は、院御所の北面を警固する武士として勤めたのち、若くして出家し、放浪の旅を続けながら2



（もし叶うなら、2月15日頃の満月の日に、満開の桜の下で死にたいものだ）
現代でもこの歌は人気があるが、詠まれた当時から高く評価されてきた。それは、西行がこの歌の通りの死に方をしたからである。

である。

3000首の和歌を残した。武士であり歌人であり自由人でもあった。

なかでも有名なのは、次の歌である。

『願わくば 花の下にて春ならむ その如月（きさらぎ）の望月のころ』

気になって仕方がなくなる。そこには寂寥（せきりよう）感と一抹の寂しさがつきまとう。
そんな気にさせるのもまた桜の魅力なのだが、作家の篠田達明は「桜のようにパツと咲きパツと散る情念を好む」日本人は、だからこそ「物事を

旧暦2月15日は釈迦の入滅の日。実際に西行が亡くなったのは2月16日、身を寄せていた大阪府南河内郡にある弘川寺で最期を迎えた。かつて詠んだ歌のとおりに逝った西行を知って、あんな風に自分

も死にたいものだ。と貴族たちは皆心の底からうらやんだという。

桜は梅に比べると、咲いている時期が短い。華やかな姿に喜んでいたら思ったら、もう散り際が気になる。雨予報を耳にしようものなら、やたら

桜は、別れや出会いの象徴でもある。学校のはじまりや新しい職場、新鮮な顔ぶれ……。季節はめぐり、人生は進んでいく。満開の時期は短いのに、桜にまつわる思い出を持つ人はとても多い。そんな人々の想いに応えるかのように、桜の花は今年も堂々と咲き誇る。

イラスト・伊藤香澄